

医師不足・過重労働が社会問題化し、地域と診療科ごとの適正配置はもちろん養成数自体の見直しを迫られつつある。

ただし、病院・診療所の連携とも関連がある。その地域医療の在り方を、身をもって教えてくれた「町医者」を思い出す。

やぶ医者のつぶやきとなみだ

東京都三鷹市牟礼^{むれ}で内科・小児科の診療所を40年続けた森田功さんが逝って、ちょうど10年目。「やぶ医者のつぶやき」「やぶ医者のなみだ」等で知られる随筆家でもあった。当時、医療問題を担当していた筆者は何度もお会いし、開業医の使命や役割を教えてもらった。作品を読み返すと、戦後の医療史と共に歩んだ町医者の典型に思える。「団地ができたばかりで、患者は溢れ、往診も多く、何より借金に追い立てられて、稼がずには居られない事情もあった」「一夜の間に8度往診を繰り返し、最後の往診を終える頃は夜が白み始め」……

共に笑い、泣く町医者の誇りを

1961年の「国民皆保険」施行は医療サービスを飛躍的に普及・定着させていく。この頃流行のスクーターで患者宅を回る開業医は「神風ドクター」と呼ばれた。それがまもなく小型車に替わる。

「道路が混んでいて車が進まない。開業したところは数分で行けた小村家まで、最近は30分近くかかる」。診療所にデンと座って患者を待つ開業医が多くなるなか、森田さんは持病の喘息にゼイゼイ咳き込みながら、往診を大事にした。

小村家のおばあちゃんは86歳になり、検査と治療の繰り返しに「二度と入院はしたくない」と言い張って自宅にこもった。

ある日、「様子がおかしい」と電話が入る。へ駆けつけると、下顎で空気を集め飲み込むような臨終の呼吸だった。子息らがほらめくもりが消えていくと嫁や孫に呼び掛けた。私は布団の裾に座り、膝頭を両手でつかんでうつむいた。「おばあちゃん」「お母さん」と口々に呼び掛ける声を聞いていると、涙が手の甲に滴った。これほどつらい仕事が生

の中にまたとあるのだろうか……
（「やぶ医者のなみだ」から）

「振り分け医」に徹して

森田さんは、開業医は振り分け医者なんです」とよく言った。発熱は風邪が、重い病の兆候が、自分の手に負えない場合はすぐ専門医や病院を紹介する。その見極めには幅広い知識と臨床経験、それに患者を抱え込まない姿勢がいる。

患者が亡くなると「必ず通夜か葬儀に出ます」と森田さんは別に気負う風もなく語った。71歳で死去した時、自らは葬儀も墓所も不要、遺体を解剖実習に献体するよう言い残す。遺族もその遺言を守った。

時代は変わった。検査装置や手術機器の発達・普及は、患者を重裝備の病院・一部の診療所へ集中させる。しかし、逆に患者というより高齢の障害者とも言うべき寝たきり、認知症の急増や自宅での終末期医療を願う声は、かつてとは異なる訪問診療・往診の必要性を高

め始めた。

「在宅療養支援診療所」は24時間対応や自宅・非医療機関での看取りを促す仕掛けである。

森田医師の時代と違うのは、医師と訪問看護師、ホームヘルパー、ケアマネジャーら多種多様なチームで患者・家族を支えることだ。それが余りにも病院に頼りすぎた、この半世紀の修正作業になるかどうか。

開業医のあり方も問われる

日本医師会が公表した、グランドデザイン2007・国民が安心できる最善の医療を目指して「は、国民一般、患者、医師へのアンケート結果もまとめている。

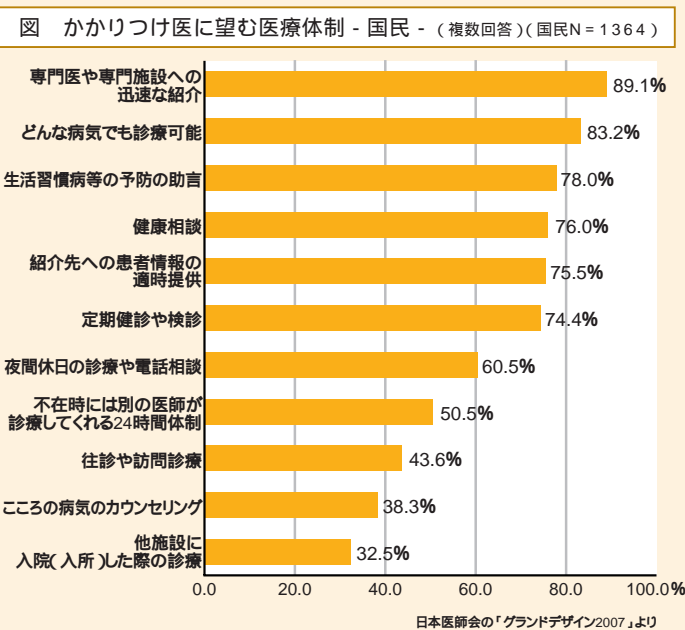
国民一般(有効回答13364人)が、かかりつけ医に望む医療体制のトップは、専門医や専門施設への迅速な紹介に続き、夜間休日の診療や電話相談、24時間体制、往診や訪問診療などは開業医の多くが見失った

医師不足

サービスではないのか(図参照)。医師(有効回答1288人、うち病院医師684人)に課題を聴くと「過労のためによい医療ができていないと思う事がある」との訴えが病院医師で69.0%、診療所医師で41.0%(複数回答)。「よりよい医療を実践するための改革や環境整

備へ向けた重要課題について、医師を援助する専門技術者の増員」との答えが病院医師では57.6%、診療所医師で27.1%、「自院の医師の増員」との回答も病院医師では51.9%、診療所医師で10.6%(複数回答)。

確かにOECD(経済協力開発機構、加盟30カ



国)の平均的な医師数は人口1000人当たり3.1人、日本では同2.0人。グランドデザインは、仮にOECD並みに引き上げるなら、医師55%増員」と弾くが、開業医は地域のニーズにどう応えるか、いかに病院と連携し、過度の病院頼みを避けるか、それも自らの課題にしてほしい。

宮武剛の

Go Miyatake

社会保障
言論

宮武 剛(みやたけ・こう)

早稲田大学政経学部卒。毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学教授を経て、現在、目白大学教授。著書に『介護保険の再出発 医療を変える・福祉も変わる』(保健同人社)。